



マイ・ガーデニング デジタルカメラで楽しさが2倍に



パティオに咲く「インパステンス」「ペゴニア」「日日草」

10年前に家を新築したときに、パティオ（中庭）を作りました。鉄筋の建物なので家に潤いをとということで、「パンジー」や「デイジー」を植えたのが始まりです。季節は秋でした。翌年の春には、「チューリップ」や「水仙」、夏には「カサブランカ」や「ペゴニア」と少しずつ花の種類も増えていきました。

仕事から帰って来ると、花々が出迎えてくれます。花々に包まれていると、仕事の疲れも癒されます。楽しいガーデニングですが、土の入れ替えは、結構大変です。また、チョウチョウが飛んでいたと思っていたら、幼虫に1日で葉っぱを全部食べられてしまったこともありました。

5年前から、新しい楽しみが加わりました。きれいに咲かせた花をデジタルカメラで撮影することです。現在は、撮影した花々の写真を職場に飾って楽しんでいます。
中央町一丁目・小倉芙美子さん

元気の素

中央町1丁目 武田 裕子さん 30歳

1歳3カ月になった、我が家のみなみです。最近はいたずらぶりも立派になり、日々の成長に驚かされる毎日です。共働きの私たち夫婦にとって、このとびきりの笑顔で迎えてくれる娘の存在は、元気の素となっています。こうして安心して働けるのは、娘を温かい心で預かってくれるベビーシッターさん。そして両家の家族の協力あってのことと感謝の気持ちでいっぱいです。成長に伴い、あれもこれもと娘に対する願望が増えつつある今日この頃ですが、人の痛みのある優しい心を持った子に育ってくれるよう願っています。



この笑顔が「元気の素」みなみちゃん（1歳3カ月）

KOGA 万華鏡

古河ゆかりの刀工たち

～古河藩の武具展より～



土井利位の命により作られた
固山宗次の刀

伊藤巖氏の研究によれば、古河ゆかりの刀工は十数人を数えます。とくに江戸時代後期には固山宗次とその一門、固山宗平・泰龍斎宗寛・泰龍子寛次・一専斎寛重、さらに幕末古河城中で日本の刀を作ったといわれる源信重などがあげられます。

このうち固山宗次は奥州白河に生まれ江戸で桑名藩の刀工に召し抱えられます。明治初年まで作刀し江戸後期を代表する刀工となりました。古河藩との関係も深く藩主土井利位や家老小杉氏のために作刀していました。

弟子の宗寛も奥州白河に生まれ江戸で固山宗次入門し、のち古河藩お抱えとなります。はじめの刀銘は阿武隈川宗寛、のち泰龍斎宗寛を称し、銘の書体も楷書から隷書に変わります。

宗寛も師匠の宗次同様多くの刀を残しています。両人とも地刃が美しい。

く切れ味もすぐれていました。幕府の御佩刀御試用役、山田朝右衛門吉亮が明治維新後語った話のなかに、最後に罪人を切った刀が泰龍斎宗寛だったとあります。本展には切手山田吉豊の試し銘が入った刀が3振展示されています。

しかし維新後、宗寛と子息寛次は東京でバリカン散髪師、羅紗切鉄作りに転業を余儀なくされました。宗寛の甥、一専斎寛重も古河から支藩の刈谷藩刀工となり腕もよかったです。こうして明治以降、古河に限らず刀鍛冶は衰微しました。やっと戦後に美術刀剣として復活し、現在全国に約300名の刀工が日本独自の鍛冶技法の研鑽に励んでいます。（同展は11月24日まで）

古河歴史博物館学芸員 鷲尾政市